

牧師の告白

ウィルキー・コリンズ



ぼくは大衆版で新しく出たばかりの有名な裁判の事例集に全神経を集中していました。ちよūdその時のことです——イングリランド教会⁽¹⁾で牧師をやっている兄が、突然ぼくの背後から肩越しにのぞきこみ、この本に気づいたのは。

ぼくは、たまたま読んでいた裁判のページに、いきなり兄から指を置かれ、その顔を見て思わず息を止めてしまいました。真つ青になっていたからです。兄の目は開いた本のページに釘づけになっており、その表情はぼくを当惑させ、不安に陥れるのに十分でした。

「うわっ、兄さん、どうしたんですか？」

開いたページに指を置いたまま、兄は放心した奇妙な面持ちで次のように答えました。

「ほとんど忘れていたけど、また思い出したぞ」

「何を、ですか？ この裁判のことを知っている、なんて言うつもりじゃないでしょうね？」

「知っているさ。被告人は有罪だつたんだから」

「有罪ですって？」 ぼくはオウム返しに言いました。「だって、この男は陪審で無罪放免になつたんですよ！ 裁判官のお墨つきでね。一体全体、どういうつもりなんですか？」

「あの裁判にはいろんな事実が関係していたんだぞ。裁判官にも陪審員にも伝わっていないような——法廷でそれとなく言われたり、ささやかれたことさえないような事実だ。私だけが——自分自身の見聞から、自分自身の経験によつて——知っているんだ。とても

悲しい、とても不思議な、実に恐ろしい事実なんだよ。この世の人間に話したことはない。自分でも忘れようと努力してきたからね。でも、おまえが——何の罪もないんだが——また思い出させてしまった。その圧迫感で悲惨な気持ちになつてしまふよ、私は。おまえが書齋でどんな本を読んでいたかが構わんが、その本だけは避けてほしかった！」

その時にはもう好奇心を大いに刺激されていたので、ぼくは率直に言いました。

「きつと、血のつながっていない他人には言いたくないことでも、ぼくのような弟であれば、話してくれますよね。ぼくたちは別々の職業に就きましたし、同じ学校を出たあとは別々の国に住んでいます、それでも信頼してくれますよね、ぼくのこととは？」

兄は少し思索している様子でした。

「そうだな、信頼はできそうだな」と言つて、しばらく間を置いてから、兄は奇妙な質問でぼくをギョツとさせました。

「おまえ、信じるかい？ この世に死者の魂が舞い戻つて、生きている人間の前に現われるつてことを」

ぼくは慎重に——幽霊の問題に関する偉大な英国作家⁽²⁾の言葉を借用しながら——答えました。

「兄さんが提起された問題は、五千年たつてもまだ解決されないような問題ですよ。そうした理由だけでも、いい加減に扱えない問題ですね、それは」

兄はぼくの返答に満足したようです。

「約束してくれるかね？」と、兄は話の穂を継ぎました。「私が生きていくかぎりは、おまえに今から話すことを秘密にしておくつて。死んだあとは、どうなろうと構わんよ。私の体験談については、同じようなものを見て、同じようなことを信じていた先人たちの体験談と一緒に、出版してもらっても結構だ。おまえの耳だけに話して聞かせることを、いつか世間が知ったからといって、それだけ悪くなることもなからう。むしろ、それだけよくなるかもしれないからな」

兄はその時ぼくに打ち明けてくれた話を二度としました——のちに死の床に就いた兄のそばに、ぼくが立つまでは。死に際に兄はジェロメットの話覚えてるかと思ねました。「他の人間には、私がおまえにしたように、ありのままに話してくれ」

ということ、兄が死んだ今、ぼくは話を再現してみます——できるだけ兄自身の言葉を使つて。

* * * * *

それは何年も前の、ある晴れた夏の夕べのことだった。ひと晩ぐらいクレモン公園⁽³⁾で楽しもうじゃないかと仲間の学生に言われ、待ち合わせのためにテンプル法学院⁽⁴⁾の部

屋を出た時のことだったよ。

そのころ、おまえはインドに赴任する途上において、私の方はすでにオックスフォードで学位を取っていたよね。私は、職業として聖職者ではなく、弁護士の方を選んでしまい、父をひどく失望させていた。白状すると、特定の職業に就くことなんか、その頃は深刻に考えていなかったのさ。ロンドン生活の楽しみを味わうための口実が必要だっただけで、その口実を与えてくれたのが法律の勉強だったんだ。それで、法律を職業として選んだというわけさ。

約束の落ち合い場所に着くと、友だちが約束を破ったことにすぐ気がついた。十分ほど待つと、私は堪忍袋の緒が切れて、そのままひとり公園に入ってしまったよ。

踊り子専用のステージを二度、三度ぐるぐる回ってみただけど、仲間の学生を発見することとはできず、その頃たまたま知り合いになっていた者たちにも会えなかった。

今では思い出せない何らかの理由で、その晩の私は普段のように上機嫌ではなかった。やかましい音楽には神経を逆立てられ、ポカーンと口を開けて見とれているかぶり、つきの客どもにはいらだちを覚え、泥水家業の厚化粧をした女どもの媚こびには憂鬱な気分させられ、胸糞が悪くなってしまう。それで、私は葉巻入れを開けて、公園の静かな脇道の方へ足を向けたのさ。

いつも葉巻を選ぶ時に注意する人は、注意を払わない人間に比べて、よいことが一つあ

るんだぞ。それは最後の一本まで、いつも葉巻入れの中で一番よい葉巻を吸えるってことさ。そんな葉巻を選び出すことに熱中していた、ちょうどその時に背後で次のような言葉が——外国なまりの女性の声で発せられるのが——聞こえてきたんだ。

「すぐに立ち去ってください！ もう何も話したくありません！」

振り返ってみると、質素ながらも趣味のよい服を着たお嬢さんが、私の前を足早に通るすぎて、公園の人通りの多い方へ行くのが見えたんだけど、それは怒りと不安が入り混じったような顔だった。ある男が（夕方のうちに飲んだワインで悪酔いしていたのは明らかだが）彼女を追いかけながら、酔った勢いで無理やり言い寄っていてね、その下品な言葉と態度たるや無礼この上なかった。女性の方は若い美人で、通りすがりに懇願するような視線を私に投げかけて行つたんで、それを無視するのは男じゃないと思つたよ——若い男のすることじゃない、と言うべきかな。

私は、ならず者との不名誉な喧嘩けんかに巻き込まれることなんか気にかけて、すぐ彼女を守るために前に進み出た。当然のことながら、この男は私の介入に向かつ腹を立て、私もまた腹の虫が承知しなかった。こちらにとつて幸いなことに、私が男をなぐり倒そうと手を挙げた瞬間に、この酔っ払いの存在に気づいていた警官が現われて、そいつを職権によつて公園から追い出すことで、言い争いを静めてくれたんだ。

すでに集まり始めていた群衆から彼女を連れ出してやつたものの、彼女は明らかにおび

えていた——だって、私の腕に置いた手が震えていたからね——でも、彼女には一つだけ賞賛に値する点があったよ。それは大騒ぎしなかったことさ。

「二三分も座っていれば」と、かわいらしい外国なまりで彼女は言ったよ。「すぐまた普段の自分に戻って、親切なあなたに迷惑をかけることもないでしょう。本当にありがとうございます、私の面倒をみてくださいますよ」

私たちは公園の中で人目につきにくい、小さな噴水の近くにあるベンチに腰をかけた。明るいガス灯が噴水の外側をぐるりと一列に取り巻いていたので、私は彼女の顔をはっきり見ることができたよ。

さつき彼女のことを「お嬢さん」と言ったけど、彼女を簡単に言い表すならば、それ以上正確な表現はないだろう。

ほっそりした小柄な女性、まったく巧妙に作られた小さな人形みたいな女性だった。髪と目の色はともに真っ黒、髪は天然の巻き毛、目の表情は穏やかで、どちらかと言えば悲しげだったよ。そのとき私が見た感じでは、顔色はとても青ざめていたが、おちよぼ口は魅力的で申し分なかったね。よく覚えているんだが、特に魅了されたのは彼女の頭の姿勢で、その優雅さと勇ましさは実に印象的だったな。小柄で物静かな女性だったが、公園にいた数千人もの他の女性の中にあっても、比類なき女性として、その頭の姿勢だけでも彼女を見分けることができただろう。彼女の唯一の欠点——左目のわずかな「斜

視」——でさえ、何とも不思議なことに、風変わりで美しい彼女の顔の魅力を増しているように思えたよ。質素だが趣味のよい彼女の服についてはすでに述べたよね。ここで付け加えておかねばならないのは、その服の素材が高価なものでないこと、そして彼女はどんな種類の宝石も装飾品も身につけていなかったことだ。このお嬢さん、決して金持ちじゃないが、それは男の目で見ても分かることだったよ。

彼女は実にゆつたりとした、気取りのない女性だったんで、私たちは赤の他人なんかじゃなく、昔からの友だちみたいに、気楽に話を始めることができた。

彼女を護衛してくれる殿方がいないのはどういうわけなのか——私はそう尋ねてから、「あなたは若くて美しすぎる」と、イギリス人らしい鈍感さで言ってしまった。「だから、こんな場所にひとり来てはいけませんよ」

彼女は、私のお世辞が耳に届かなかったかのように無視し、落ち着いた様子で受け流して、あっさりと次のように言ったよ。

「私を護衛してくれるような友人はおりませんわ。今晚は、まったくひとりぼっちで、さびしかったので、ちょっと気晴らしに公園に行つて音楽でも聴こうと思つたのです。門の所で払う額も大したことはなく、たつたの一シリング⁽⁵⁾でした」

「護衛をしてくれる友人がいないですって？」と、私はオウム返しに言った。「きつと、今晚あなたと一緒にここに来ることができれば、それだけで幸せだと思つたような男がいる

はずじゃないですか」

「どんな男の人ですか、それは？」

「それは」と、私は軽率な返事をしてしまった。「イングランドの人たちがいい人と呼ぶような男のことですよ」

この愚かな言葉が口から出た瞬間に、それを撤回できるものなら、私はどんなことだったただろう。下品にも彼女に対して無礼を働いてしまったという気になったよ。彼女が顔に悲しみの表情を浮かべ、目を地面に伏せたので、私はすぐに謝罪した。

「謝罪される必要などありませんわ。お知りになりたいのであれば——ええ、イングランドの方がいい人とおっしゃるような男性が、かつて私にもおりました。私のもとを去って遠くに行つてしまいましたけど。どうか、もう彼のことはおっしゃらないでください。休んだおかげで気分も楽になりましたわ。もう一度お礼を言つて、帰宅させていただきます」

彼女は立ち上がつて歩き去ろうとした。

こんな別れ方はするまいと固く決心していた私は、彼女の家まで安全に送らせてほしいと頼んでみた。彼女がためらっていたので、私は男としてあるまじきことに彼女の恐怖心に訴え、「あなたを悩ませた例の悪党が、門の外で待ち構えていたとしたら？」と言つてしまった。それで彼女の心は決まったみたいだ。彼女が私の腕を取つたので、さわやかな夏の夜、私たちは一緒にテムズ河の堤防に沿つて歩いて行つたわけさ。

半時間ほど歩き、彼女の下宿——見たところ、とても貧しい人々が住んでいるような、路地脇の小さなみすぼらしい家——に着いたよ。彼女は戸口で手を差し出し、おやすみなさいと言ったけど、この外国なまりのお嬢さんに対する私の関心は、再び彼女と会える希望もないまま別れることに同意できないほどになっていたので、次の日にまた訪問する許可を求めずにはおれなかった。そのとき、街灯の光の下に立っていたんだが、彼女は返事をする前に、憂慮の色を浮かべた顔で穴の開くほど私をじっと見ていたよ。

「ええ」と彼女はやつと言ってくれた。「紳士かどうかは見れば分かりますわ。よろしければ、明日いらしてくださいな」

そんなふうには別れたのさ。そして、私は——何の疑いもなく、何の予感もなく——人生のひとこまに入って行つたんだ。今、偽りのない悔恨にとらわれて、それを振り返って話しているってわけだよ。

* * * * *

私は、長い年月が経過して分別もある年齢の男となり、今は牧師としての立場でおまえに話をしている。このことを記憶しておいてくれるなら、その翌年に起こった様々な事件について、なぜ私ができるだけサッと素通りしようとするのか——若さゆえの過ちと妄想

について、なぜ私ができるだけ話をしないようにするのか、おまえはいつか分かってくれるはずだ。

翌日、私は彼女を訪問した。それ以後、何日も何週間も私は訪問を繰り返し、とうとう例の路地脇の見すばらしい小さな家が第二の、とはいえ（こう言うと、恥ずかしくて自責の念に駆られるんだけど）自分の家より大切な家になってしまった。

彼女自身のことについては、そしてこんな状況になったんだから、私に打ち明けてもよからうと思つた彼女の過去については、簡単に全部おまえに繰り返して聞かせることができるよ。

彼女に届いていた手紙の宛名によれば、彼女の名前は「ジェロメット嬢」だった。下宿の無知な連中や近所の小売店主ども——普通のイギリス人の舌で彼女の名前を発音するのは簡単でないと思つていた者たち——の間では、「フランスのお嬢さん」という愛称で呼ばれていたよ。私と知り合つたとき、彼女は異国の人々の中で孤独な生活に身を任せていた。両親に先立たれ、フランスを離れてから、すでに数年がたつていたようだ。自分自身の収入はわずか——ほんの少ししかなかったんで、その足しにしようとして彼女は写真屋⁽⁶⁾のためにスチール写真の色づけの仕事をしていた。「もう私の家族については尋ねないでください」と、よく彼女は言っていたよ。「自分の国では——親類縁者の間では、私は死んでも同然なのですから」

これだけ——彼女が私に話してくれた自分自身のことは——文字どおりこれだけだったよ。その日から今日まで、彼女の悲しい過去については、それ以上まったく分らない。

彼女は自分の姓を言ったことがなく——フランスのどこの出身か、イギリスに住むようになってどの位か、私に話したことさえないんだ。生まれも育ちも彼女がレディーであることは疑いの余地がない。あの礼儀作法、社交上のたしなみ、考え方や話し方すべてが、それを証明していたからね。でも、そうした表面的なもの裏に、最近の若い女性にはない不思議な面があつて、そこに彼女独自の性格を見ることができたよ。彼女は物静かだったけど、根っからの運命論者で、死者たちが実際に幽霊として現われると固く信じていたんだ。それからまた、お金の問題では、自分独自の奇妙な見解を持っていたね。私が財布を手を持っていると、いつも必ず彼女は断固として私を遠ざけようとするんだ。もつとよいアパートに引っ越すことも拒んでいたよ。あの小さな家はみすばらしいけど、家の中はきれいだし、一緒に住んでいる人々も親切で——それで十分だつて言うんだ。私が彼女にプレゼントするのを許してくれた一番高価なものは、小さなエナメル細工の指輪——寶石店の中で最も地味で安い指輪だったよ。私と交際している時はいつも、彼女は誠実そのものだった。どんな場合でも、どんな状況でも、いつも妥協することなく、成句にあるように「真情を吐露」していたからね。

「あなたのことは好きですわ」と、彼女は私に言ってくれた。「尊敬もしています。あな

たが私に対して誠実であるかぎり、私も常に誠実でいますわ。でも、私には愛する心がないのです。それは別の男性によって持ち去られてしまったからなの。どこにかは分かりませんが」

別の男性とは誰なのか？

彼女は答えるのを拒んだ。その男の身分と名前はずっと極秘事項のままだった。二人がどうやって出会ったのか、なぜ彼は彼女のもとを去ったのか、彼女に母国と友人を捨てさせて亡命者にしたのは彼の罪なのか、これらの疑問は決して解けなかったよ。彼女は彼をまだ愛している自分自身を軽蔑していたけど、その情熱は彼女には強すぎた——そのことを彼女も認めて、あからさまに嘆いていたが、その腹藏のなさは彼女の性格の一部として特に目を引いていたね。これとは別に、彼女は私と付き合い始めた最初のころ、彼が戻ってくる信じていることを包み隠さず述べてくれた。明日かもしれないし、何年も先かもしれない。彼がたとえ自分の残酷な仕打ちを後悔していないにせよ、自分の人生から何かがなくなつたかのように、まだ彼女のことを恋しく思っているだろうし、遅かれ早かれ、きつと戻ってくるに違いないということだった。

「では、戻ってきたら、彼を受け入れるんですか？」と、私は尋ねてみた。

「不本意ながらも受け入れるでしょうね。彼が戻ってきたら、その日を境に私の人生は最悪なものになると、はっきり自分でも確信しているのですが」

私は彼女に異議を唱えようとした。

「君は自分の意志というものを持つてはいるはずですが、彼が戻つてこようとしたら、その意志を働かせなさい」

「私には自分の意志というものがありません」と、彼女は静かに答えた。「あの人に関するかぎりにはね。彼を愛することは私の不幸な運命なのです」

一瞬、彼女の視線が私の目に注がれたが、そこには絶望による自暴自棄の表情が見てとれた。「このことについてはもうたくさんです」と、いきなり彼女は付け加えるように言った。「もう話すのはやめましょう」

その時から私たちはこの無名の男について二度と話をしなかった。私たちが最初に会つてから一年間、直接であれ間接であれ、彼女が彼についての噂を聞くことは全然なかったよ。彼は生きているかもしれないし、死んでいるかもしれない。彼についての噂も便りも全然なかったんだ。私は彼女のことを大好きだったんで、このことには満足だった。私たちが彼に邪魔されることはなかったんだからね。

* * * * *

最初の一年が過ぎ去つた——そして、終わりがやって来た。それは、おまえが予期した

かもしれないような終わりでも、私に予想できたかもしれないような終わりでもなかったよ。

おまえは、母国から届いた手紙で、病気の母さんが危篤になったと知らされた時のことを覚えているかい？ 私が今ちょうど話しているのと同じ頃のことだった。母さんは息を引き取るほんの数時間前に、私をベッドの脇に呼んで、親子二人だけにしてほしいと言った。そして、自分の死が近づいていることに私の注意を向けさせ、今後の私の人生について語ってくれたよ。母さんは気づいていたんだ。その当時、私が注意を集中させていると思われていた法律の勉強に、これっぽちも関心がなくなってしまったよ。母さんは、聖職に就くことを拒んだ私に、考え直してくれるように懇願しながら、最期を遂げてしまったよ。

「お父さまは望みをかけていらっしやるのよ」と、母さんは言っていたよ。「私の頼みを聞き入れておくれ、おまえ。そうすれば、私が死んでも、おまえが手助けをして、お父さまを慰めてやることができるから——」

ここで母さんは力がなくなったり、もう何も言えなくなったり。母さんが私にした最後の頼みを拒むことなんかできただろうか？ 私はベッドの脇にひざまずき、そのやつれた手を自分の手に取り、「息子として母さんの最後の願いに敬意を払います」って、おごそかに約束してやったよ。

こんなふうに神聖な約束の義務を負ったからには、否応なく強要された犠牲を受け入れ

ざるを得ないじゃないか。品位を落とすような交際からは足を洗うべき時が来たんだ。その努力にどんな犠牲を払おうとも、私の妻ではない——そうなることもできない不幸な女性と今すぐ、永久に別れなくてはならなかった。それで、ある霧の深い、どんよりした日の夕暮れ時に、永遠の別れとなる言葉を伝えるために、私は暗澹たる気持ちで出かけて行ったのさ。

彼女の下宿はテムズ河の堤防からそれほど遠くはなかった。その場所に近づくとつれ、暗闇が次第に増し、肌寒くて白い霧に包まれた幅の広い河の表面が、私の視界から消えてしまった。しばらく私はたらずんで、流れる河の表面にたれこめた経帷子きょうかたびらみたいな白い蒸気に、目をじっと向けていた。そして、立ったまま、絶望して、気のめいるような次の質問を自分に投げかけただけだった。

「彼女には何て言えればいいだろうか？」

霧は骨の髄まで私を冷たくしてしまった。私は河の堤防に背を向け、すぐ近くの彼女の下宿に向かった。それから、「やらなければ！」と言いながら、鍵を取り出して、家のドアを開いたよ。

彼女の小さな居間に入ったとき、彼女はいつもの仕事をしていなかった。暖炉のそばに立って、うなだれており、手には開封した手紙を持っていた。

彼女が私を出迎えようと振り向いた瞬間、その顔を見た私は何かまずいことが起こった

んだと思つた。普段の態度だけで判断するなら、彼女は非常に落ち着いて自制心の強い女性だつた。その気質には、イングラントに住む私たちがフランス人の性格で連想するような、そんな快活さはほとんど見られなかつたよ。すぐに笑うような人ではないんだ。それまでの私の経験では、彼女が泣いている姿を見たことは一度もなかつたからね。でも、そのとき生まれて初めて、いつも穏やかな彼女の当惑した顔を見た。美しい茶色の目に涙が見えたんだ。彼女は出迎えのために走り寄つてきて、私の胸に顔をうずめ、突如として全身を震わせながら、激しく泣き始めた。

人間にすぎない彼女が、私の人生に起こりつつあつた変化について聞き及んだとは、とても考えられない。私が口を開かないうちに、この家へ私が来なければならなかつた確たる必然性に、彼女は気づいていたんだらうか？

そんなことは絶対にあり得ない。あるはずがない。

私は彼女の最初の急激な感情の高まりが静まるまで待つた。それから——不安にも増して虚脱感を覚えながら——なぜそんなに心を痛めるのかと尋ねてみた。

彼女は深いため息をつきながら、私から体を引き離し、手に持っていた開封済みの手紙を差し出した。

「お読みになつて。そして、私たちが初めて会つた時に、いつか起こるかもしれないって私が言ったことを思い出してください」

私はその手紙を読んだ。

署名は頭文字だけだったが、手紙の送り主が彼女を捨てた男であることはすぐに分かった。彼は前非を悔いて彼女のもとに戻ってきたんだよ。その証拠に、今まで拒んでいた彼女に対する正当な扱いを喜んでするということだった。彼女と快く結婚するとうんだ。ただし、それには条件があつて、彼の両親が生きている間は、結婚を秘密のままにしておく——そういう約束が彼女に課されていた。こういう提案をして、彼女の方がサラリと水に流すことに同意するかどうか、彼は待つて成り行きを見守りたいということだったよ。

私は黙つて彼女に手紙を返した。ありがたいことに、この見知らぬ恋敵は私たちが別れるのを容易にしてくれていたんだ。彼が彼女への償いとして結婚を申し出たことで、別れの言葉を持ち出すことが、私自身の義務だけでなく、彼女自身の義務にもなつてしまつたというわけさ。このことを私は即座に感じ取つたよ。とはいつても、別れやすくなつたことで、彼のことが憎くなつたのも事実だけだね。

彼女は私の手を取つて、ソファアの所へ連れて行つてくれた。私たちは並んで腰かけたが、彼女の顔は悲しいほどに落ち着き払つていたよ。物静かで、また本来の自分に戻つていたのさ。

「あの人と会うことは拒否しました」と彼女は言った。「まず、あなたと話をしてからと思つたのです。手紙を読んで、どう思われましたか？」

私はたった一つの返事しかできなかった。自分がどんな立場であるか、ありのままに述べるのが自分の務めだと思つたんだ。私は義務を果たしたよ。彼女に将来のことを自分で自由に決めさせたのさ。そんな悲しい言葉を述べたあとで、みじめな別れをいつまでも引き延ばすのは無益なことだった。それで、私は立ち上がり、これが最後と思つて彼女の手を取つた。

まるで昨日の出来事みたいに、最後の彼女の姿が今でも思い浮かぶよ。彼女はずっと喉のどの疾患で苦しんでいたんで、首に白い絹のハンカチをゆるやかに巻いていた。紫色のメリノ毛糸(7)の地味な服を着て、その上に黒い絹のエプロンをつけていた。顔は死人のように青白く、私の手をギュッと握つた彼女の指は、氷のように冷たい感じがしたよ。

「立ち去る前に、一つだけ約束してください」と私は言った。「生きているかぎり、私は君の友だちだよ——それ以上の存在ではないにせよ。いつか困つたことになったら、私に知らせるって約束して——」

彼女はハツとして、まるで突然の恐怖に襲われたかのように、私から身を引いた。

「不思議ですわ!」ひとり言のように彼女はつぶやいた。「彼が私と同じように感じているなんて。あの人も、今後の人生において私の身に起こるかもしれない、そのことを恐れているのです」

私は彼女を安心させようとした。私の真意が何かを——つまり、あんなことを言ったの

は、人生によくある偶然の出来事や変化について考えていたにすぎないのです、と彼女に言おうとしたんだ。

彼女は私の言うことに注意を払わず、戻ってきて私の肩に手を置き、悲しそうな物思いに沈んだ顔で私を見上げた。

「この問題について考えていることは、あなたと私で違うのです。前にも一度、私には不吉な予感がするってことを告白しましたわよね。この人が戻ってきた場合のことを最初にお話した時です。今から言っても構いませんわよ、その時に言わなかったことを。私は若くして悲惨な最期を遂げる運命なのです。私の言うとおりで、それでもなお、そんなことを聞きたいと思うほど、私に対する関心が残っておられますか？」

彼女は身を震わせながら黙ってしまい——そして、次のような驚くべき言葉を付け加えた。

「そのことを聞く宿命にあるのです、あなたは」

そう言った時の彼女の揺るぎない確信に満ちた口調に、私は不安と悲痛を覚えずにいられなかった。私の顔を見て、彼女には胸の裂けるような私の悲しみが分かったはずだよ。

「ほら、ほら！」と、彼女はいつもの態度に戻りながら言った。「そんなに深刻に考えては駄目よ、私の言ったことなんか。私みたいに孤独な生活を送っている哀れな娘は、変なことを考えたり、話したりするものよ——時々ね。分かりました、あなたに約束します。

いつか困ったことになったら、お知らせしますわ。どうもありがとう——これまで親切にしてください——さようなら！」

彼女がキスをするとき、一粒の涙が私の顔に落ちた。私たちを隔てるドアが閉まり、暗い通りが私を迎えてくれた。

雨が激しく降っていたが、私は吹き流される雨を通して彼女の窓を見上げてみた。カーテンは開かれていたよ。その間に立った彼女は、背後のテーブルに置かれたランプに薄暗く照らされ、私と最後の視線を合わせようと待っていた。ゆっくりと片手を挙げて、彼女は初めて会った夜に私を魅了した、あの自然な飾り気のない淑やかさで、さようならと窓辺で手を振ってくれたよ。カーテンが再び閉まって——彼女が姿を消し——私の前には、そして周囲には、夜の暗闇があるだけだった。

* * * * *

それから二年後、私は死の床で母に約束したことを履行し、イングランド教会の牧師になつてた。

父の伝手があつたんで、その新しい仕事で第一歩を踏み出すのは簡単だったよ。まず手始めに牧師補として見習い期間を勤めたけど、そのあと三十歳になる前に西イングランド

の聖職者に任命されたってわけさ。

その新しい聖職禄で、望むかぎりの便益が与えられた——十分な収入だけは例外だったけどね。欲しいものはほとんどなかったし、まだ結婚もしていなかったが、いろんな理由で所得を増やした方がよかろうと思つてね。それで、私と同じ立場の若い牧師たちの例にない、大学⁽⁸⁾でキャリアを積むための準備が必要な、そんな弟子たちを受け入れることに決めたんだ。親戚の人たちが骨を折ってくれ、幸運の女神もまだ私の味方だったみたいで、最初から二人の弟子を獲得できたよ。そのとき私に受け入れる準備があつたのは三人だった。そうこうするうちに、その三人目が現われてね。その時の状況があまりに特殊だったんで、これはおまえに詳しく話して聞かせる価値があると思うよ。

それは夏休みのもので、二人の弟子はすでに実家に帰つていた。近所の牧師が親切にも私の職務を代行してやろうと言つてくれたおかげで、私も二週間の休暇を取つて、ロンドンの父の家で過ごせるようになったんだ。

首都ロンドンに滞在中、弁舌さわやかな説教で評判の牧師がいるということでも有名だった教会から、説教をする機会を与えられてね。その申し出を受けたとき、説教を聴きに集まるであろう非常に大きな、聡明な会衆の前に私が最善を尽くしたいと思つたのも当然だった。

今まさに話をしている頃のことだったけど、ある恐ろしい悪事が極めて挑発的な状況下

で行なわれ、それが発覚したということでイングランド中が震撼していた。それで、この犯罪を渡りに舟と思ひ、私は説教の主題に選んだのさ。最も善良な人間でさえ、最も邪悪な人間と同じように、悪の挑発や教唆を受けやすい——そうした弱い人間であることを認めたと、私は今回の説教の目的として次のことを教えるようにしたんだ。つまり、キリスト教徒は信仰という名の保護を受けて、悪の誘惑から確実に逃れるための避難所をそこに見出すことができるという内容だ。私は、キリスト教徒が初めて悪の勢力に抵抗する際の苦しさについて——自分自身の弱い、不道徳な部分に逆襲される最悪の時でさえ、キリストを信じる心があれば、惜しみなく差し出されるはずの救いの手について——信仰の厚さと決意の固さに対する究極的な報いとして確実に得られるものについて——そして、最終的な勝利に伴う神聖な心の安らぎと幸福感について、詳しく話して聞かせたんだ。その時の私は本当に熱い信念を持って、こうした趣旨の説教をしたんだが、私を選んで説教壇に立たせてくれたことに對して名を汚すようなことはなかったと、少なくとも自分では思っているよ。なにせ、会衆の注意を最初から最後まで引きつけていたんだからね、私は。

ところが、お勤めが終わって聖具室で休んでいると、鉛筆書きの短信を手渡された。会衆の一人——紳士だった——が、非常に重要な問題があるから私に会いたい——場所と時間は私が好きに指定してよいので、自分の方から訪問したい——というんだ。自分がちゃんとした人物かどうか確認したいなら、父親の名前はおそらく知っているだろうから、そ

ちらに照会していただきたいということだったよ。

照会先の名前は確かに聞き慣れた名前で、この父親はロンドンの世界ではなかなか有名で影響力もある人だった。私は、短信を寄こした男が次の日の午後に訪問できるように時刻を指定し、使いの者をやって名刺を持ち帰らせてやった。

* * * * *

この見知らぬ男は時間どおりに姿を見せた。私よりは二、三歳ほど若い感じだった。議論の余地がないほどハンサムで、礼儀作法については紛れもない紳士——とはいえ、なぜかは分からないが、彼が部屋に入った瞬間、私は彼に強い反感を覚えたよ。

最初に私たちが前置きとして儀礼的な言葉を交わすと、訪問客は次のように所期の目的を告げてきた。

「先生は田舎にお住まいですか？」

「西イングランドに住んでいます」

「ロンドンの滞在は長いのですか？」

「いや、明日には牧師館に戻ります」

「お弟子さんは置いておられますか？」

「ええ」

「空きはあるでしょうか？」

「一つありますよ」

「明日、ぼくが先生の弟子として一緒に行くとしたら、おいやでしょうか？」

この提案の唐突さに私は面食らい、ためらってしまったよ。

第一に、(すでに言ったように) 私は彼のが好きではなかった。第二に、彼は残りの二人の弟子と——両方とも十代なので——気の合う友になるには年を取りすぎていた。第三として、私の休暇が終わる少なくとも三週間前に、彼は自分を弟子として受け入れてほしいと言ったんだ。私はその期間に自分自身の仕事や娯楽を計画していたんで、それらを保留してまで不便を忍ぶ気はなかった。

それで、彼は私がためらっているのに気づき、失望を露あちわにしたよ。

「それはもう真剣に考えているのです——」と彼は言った。「自分が失った時間を取り返すことをです。年齢的に不利なことは分かっています。事実——学校を出てから、ぼくは機会をことごとく逸してきたので、取り返しのつかないことになる前に自分の態度を改めたい——心の底から改めたいと思っています。有名大学の一つに入る準備をしたい——できることなら、ぼくにも父の名声を受け継ぐ価値が少しは残っているということを示したいのです。先生はぼくを助けることのできる方です——そうしてくださいさるように説得でき

ればの話ですが。ぼくは先生の昨日の説教に心を打たれました。こんな告白を先生の前でするのもどうかと思いますが、ぼくは先生のことかとても気に入ったのです。はつきり「ノー」とおっしゃる前に、父に会っていただけではないでしょうか？　ぼくの今回の申し出が奇妙に思えるようであれば、何なりと父が答えてくれるでしょう。今日の午後、時間を取ってくださいれば、父は喜んで先生と会ってくれるはずですよ。条件の問題については、先生が完全に満足されるように解決できると確信しています」

明らかに彼は本気だった。その真剣さが切実で心底からのものだったんで、私は彼の父親と会うことにしぶしぶ同意したよ。

この若者はだらしない遊惰な日々を送っていたようだ。今ではそれにうんざりして恥じていた。奇妙な気質の男だったよ。どうやら、秘密を打ち明けて相談したくなるような、そんな指導者、教師、友人を本当に必要としていたみたいだね。私だけにしか望みをかけていない男を失望させたりすれば、たちまち落胆してしまい、今では恥じているという目的もない怠惰な生活に逆戻りしてしまうだろう。まず三ヶ月ほど試験的に彼を受け入れることに同意すれば、条件については私の思いのままに要求できるということだった。

それでもまだ決めかねたので、私は自分の父と友だちに相談することにした。

全員が同じ意見だった（この時までは当然至極な意見に思えた）けど、それは今回の契約が私にとって素晴らしいものになるからだ。まったくの気まぐれから私が生まれも

育ちもよい若者に嫌悪感を覚え、今からキャリアを積もうというのに、そんな気持ちに影響されて自分の利益を失うのは、愚の骨頂である——そう言つて、みんなが私を非難したよ。そういった意見に押され、私は自分でも納得して、新しい弟子を公平な立場で試験することにした。ということ、次の日、彼を引きつれて牧師館への帰路に就いたつてわけさ。

* * * * *

この男には個人的に嫌悪感を覚えていたけど、認めるべき点は認めて公平に評してみよう。出だしは順調だったよ。私の小さな所帯で働いている者たちに対し、明らかに彼はよい印象を与えていたんだから。とりわけ女の召使いたちは、ふんわりした彼の美しい髪、細く縮れた鬚あごひげ、繊細な顔の色つや、澄んだ青い眼、そして立派な形の手足を称賛していた。どうしても簡単には打ち解けようとする彼の態度、この私に偏見を抱かせることになつた（うつむき加減で不機嫌と言つてもよい）彼の表情でさえ、召使たちの部屋では熱烈な恋愛感情を全員に呼び起こしてしまつたよ。「新しい殿方」は恋をなさっているんだわという結論が、その道の最高権威である家政婦長によって下された。そして、さらに興味深いことに、友だちと故郷を捨てざるを得なかつた不幸な愛の犠牲者なんだわ、とい

うことになっていた。

私自身も、この年長の弟子に対する最初の嫌悪感に打ち勝とうと必死に努力したけど、やはりどうしても駄目だった。

彼の欠点を見出すことはできなかったよ。その習慣は平穩で規則正しいものだったし、真面目に読書に耽っていたんだから。でもね、彼の心が読書に向いていないことを、私は少しずつ確信するようになった。これとは別に、彼は何かを隠しているのではないか、自分のよそよそしさが痛いほど分かっていても、その殻を打ち破ることができないし、あえて打ち破ろうともしていないのではないか、と私には思える理由がいくつかあったんだ。彼は、自分が恐れている人（あるいは人たち）から逃れる安全な避難場所として、遠く離れた私の田舎の牧師館を選んだんじゃないか、そう思ってしまう時が何度かあったんだ。たとえば、手紙類に関する彼の普段の処理方法は、控え目に言っても、ちょっと奇妙だったぞ。

そもそも彼が私の家で手紙を受け取ることはなかった。村の郵便局で留め置きにしていたからだ。彼はいつも自分で手紙を取りに行き、自分の手紙を召使いの誰かに託して収集に出すことは控えていたよ。また、私たちが一緒に散歩をしているとき、彼は自分が何か悪い目的で跡をつけられているのではないかと疑っているみたいに、こっそり肩越しに振り返っていたけど、そうした姿を見たのは一度や二度ではなかった。私は生まれつき謎め

いたことが大嫌いだったんで、彼と師弟関係を結んだ初期の段階で、物事の理非曲直を明らかにしようとした。家に私たち二人だけしかない夏休みの最後の数日間に、私の方から話しかけてみれば、この年長の弟子の信頼を勝ち得るチャンスがまだあるかもしれない、そう思ったわけさ。

「すまないけど、どうしても気になってしまっただよ——ある朝、私たちがひたすら本に専念しているとき、彼にそう言ってみた。「君の心には何か悩みがあるような、そんな気がしてならないんだ。何か君の役に立てることがあるかどうか、私の方から尋ねるのは失礼かね？」

さすがに彼は顔色を変えたね。サツと私の顔を見上げ、すぐまた自分の本にサツと視線を戻し、自分の内奥にある何か恐ろしい秘密、あるいは不本意な秘密と懸命に闘っていたようだった。だが、突如として尋常ならざる質問を発してきたよ。

「あの説教をロンドンでなされたとき、先生は真剣そのものでしたよね？」

「そんなことを疑うとは、驚いたね」

彼は再び口をつぐみ、自分自身と闘っているみたいだったが、また（今度は最初の時よりはさらに奇妙な）感情の爆発によって、私をびつくりさせた。

「ぼくは先生が説教で非難されておられた人間の一人なのです。それがぼくを先生の弟子にしてくださいと頼んだ本当の理由です。ぼくを破門しないでください！ 悪魔に誘惑

されて苦しんでいる人間について、先生が会衆に説教をされているとき、実はこの私のことを話しておられたのですよ」

この告白に一驚を喫したので、私は平常心をなくしてしまい、しばらく彼に返事をする事ができなかつた。

「破門しないでください！」と、彼は繰り返して言った。「ぼくが自分自身と闘うのを助けてください。先生には真実を話しているのです。真実を話していることについては、神様が証人になってくださいます」

「真実をすべて話さない」と私は言った。「それから、私には君を助け出して慰めることが——君の友になることができる。そのことを信じなさい」

その場の熱意に駆られて私は彼の手を取った。私が握った手は冷たくて微動だにせず、おまえは陰気で口の堅い性格の男を相手にしなければならぬぞ、という無言の警告を発しているようだった。

「私たちの間に少しでも隠し事があつてはならないよ」と言つて、私は途切れた話の穂を継いだ。「君自身の告白によれば、君は偽りの口実で私の家に来たことになる。だから、包み隠さず話すことが私への義務であり、自分自身に対する義務でもあるんだよ」

でも、この男は慢性的なよそよそしさに——その殻は一瞬だけ破られたけど——再び捕えられ始めた。次に発する言葉を口にする前に、彼はじつくりと考えていたんだからね。

「ある人間がぼくの人生の見通しを暗くしているんです」と、彼は目を本に伏せて、ゆっくりと話し始めた。「ある人間がぼくをひどく挑発するんです。その人間と一緒にいると、ぼくは（先生が説教で話しておられた男のように）いろんな恐ろしい誘惑を感じてしまいます。ぜひ誘惑の退け方を教えてください！ その人間と会えば、また私は自分自身が怖くなります。先生は私を助けることのできる唯一の方です。どうか助けてください、おできになる間に」

彼は話をやめて、ハンカチで額を拭った。

「これでよろしいでしょうか？」と彼は尋ねた——が、目はまだ本の上だった。

「それでは駄目だ」と私は答えた。「私に対して本当に心を開いていないどころか、君の人生の見通しを暗くしているのが男なのか、それとも女なのかさえ、私に教えようとしないうじやないか。君を苦しめているとかいふ挑発だが、それについて話すとき、君は人間という言葉を何度も使っているね——彼とか彼女とか言わずに。私をほとんど信頼していない、そんな男をどうやって助けることができるって言うんだね？」

私の返答で彼が万策つきたことははっきりと分かったよ。彼はまだ話していないことを言おうと努力を（すさまじい努力を）していた。駄目だ！ 言葉が喉のどにつかえているように、一語たりとも彼の口からは出てこなかった。

「時間をください」と、彼は哀れな懇願をした。「どう考えても、今すぐ、そうする気に

はなれないんです。悪気はありません。絶対に悪気はありません。でも、こうしたことに私は時間がかかるんです。明日まで待つてください」

翌日になって——また彼は延期した。

「もう一日！ はつきり話すのがどんなに困難か、お分かりにならないでしょう、先生には。ぼくは半ば怖くて、半ば恥ずかしいんです。もう一日だけ待つてください」

これまで私は彼のこと嫌いなだけだったが、このような打ち解けなさを、たとえどんなに慈悲深く斟酌しんしゃくしても（実際にしたんだけど）、私は次第に彼を軽蔑せざるを得なくなってしまった。

* * * * *

告白を延期した日になったが、実はその日に、彼も私も予期だにできなかった事件が起こった。この事件がなかったとしたら、彼は打ち明け話をしたであろうか？ 告白したかもしれないし、私の家に来ることになった当初の目的を断念していたかもしれない。

私たちは普段と同じように朝食のテーブルで顔を合わせた。やがて家政婦長が朝便の手紙を私に持ってきた。彼女は部屋を出て行かず、ぐるりとテーブルの反対側へ行き、この年長の弟子の前に一通の手紙を——私と一緒に住むようになって、同じ屋根の下で彼に配

達された最初の手紙を——置いたので、私はびっくりしてしまった。

彼はハツとして手紙を取り上げたが、手紙の上書きを見ると、彼の顔に怒りを抑えたような癢癢けいれんが走った。息づかいが速くなり、手紙を持った手が震えていたよ。ここまで私は何も言わず、その封書を彼が私の前で開くかどうか、確かめるために待っていた。

彼は怖くて私の前で開封できないようだった。それで、立ち上がって、かろうじて聞こえるような小さな声で、「すみませんが、ちょっと失礼します」と言い、部屋から出て行った。

三十分ほど待たされたよ。さらに十五分してから、私は召使いをやって、朝食のことを忘れたのかと尋ねさせた。

そのあとすぐ玄関の間に彼の足音が聞こえた。彼は朝食の間のドアを開け、手に小さな旅行かばんを持ったまま敷居の所に立っていた。

「すみませんが」と彼は言ったけど、まだドアの所に立ったままだった。「一日か二日、お留守にする許可をいただかなくてはなりません。ロンドンに用事があります」

「私で何か役に立てることはないかね？」と私は尋ねた。「先ほど来た手紙は悪い知らせかい？」

「ええ」彼の返事は素っ気なかった。「悪い知らせです。朝食をいただく時間もないのです」

「ちよつと待つてくれ」と、私は説き伏せるように言った。「私を親友と思うなら、もう少し待つて——行く前に、一体どうしたのか教えてくれ」

返事はなかった。彼は玄関の広間に出て、ドアを閉め——それから、姿を見せることなく、また少し開いて言った。

「ロンドンに用事がありまして」と、彼は繰り返して言った——自分の用向きは何か、私に伝えておくことが極めて重要であると思つているかのようにね。またドアが閉まったが、すでに彼はいなくなつていたよ。

私は書齋に行き、起こつたことをじっくりと考えてみた。

種々勘考した結果を簡単に説明してみよう。私は年長の弟子との関係を断ち切ることに決めた。彼の父親に手紙を（その日の集配に間に合う範囲で、できるだけ礼儀と敬意を払つて）書く際に、このような結論に達した理由として、次のようなことを述べたんだ。第一に、彼の息子の信頼を得るのは不可能だと思つたこと。第二に、彼の息子は今朝がた突然、不可解にもロンドンに向けて家を出てしまつたんで、必然的な結果として彼に対する責任をもちや引き受けられないこと。その二点を述べたのさ。

私は手紙を集配袋に入れた。手紙を書き終えたことで少し気が楽になり始めていると、家政婦長がとて沈痛な顔をして書齋に姿を見せた。どうやら握りしめた手に何かを隠し持つている様子だつた。

「ご覧になっていただけませんか？ 今朝、あの殿方が出て行かれてから、私どもが部屋で見つけましたものを」

家政婦長が「好奇心」という名で通っている女性の愛すべき欠点を十分に持ち合わせていることは前から知っていたよ。私はまた、年長の弟子の不可解な出立によつて、家庭内の女中たちの間で、彼を不幸な愛の犠牲者と見なす傾向が大いに高まっていたことについても、いろいろと又聞きして知っていた。機は熟したように思えたね。さらなる彼についての噂話、そして彼のいない間に本人の内情をさらに穿鑿せんさくしようとする試みは、断じて阻止しなければならなかった。

「弟子の部屋での君たちの唯一の仕事は」と、私は家政婦長に言った。「いつも整理整頓して、ちゃんと風を通しておくことだぞ。頼むから、彼の手紙や書類、あとに残していった他のものには、手出しはしないでくれ。彼の部屋で何を見つけたかは知らんが、すぐに戻しておきなさい」

家政婦長は女性の好奇心のみならず、女性の痲癩かんしゃくも十分に持ち合わせていたよ。私の話を聞いている間に、だんだん顔が赤くなり、それと分かるほど頭をツンとそらし始めたからね。

「戻しておけとおっしゃいますか、寝台と壁の間の床に？」と彼女は言ったが、私の命令に対する皮肉として、この上なく謙虚な敬意を装っていた。「小間使いの娘が部屋の掃

除をしていた時に見つけたのは、その場所なんですよ。誰にだって分かりますわ——」

家政婦長は気色ばんで話を続けた。「あの哀れな殿方が失恋して立ち去ったことぐらいい。その原因として、私が思いますに、あばずれ女が絶対いるはずですよ！」

こう言うと、家政婦長は深々とお辞儀をし、私が座っていた机の上に小さな肖像写真を置いた。

その肖像画を見て私は驚いた。

瞬時に心臓の鼓動が激しくなった——頭が急にくらくらして——家政婦長、家具、部屋の壁、すべてが揺れ出し、私の周りをぐるぐると回り始めた。

なんと、年長の弟子の部屋で見つかった肖像画は、ジェロメットの肖像画だった！

* * * * *

私は家政婦長を書斎から追い出していたので、机の上にある写真のフランス女性と二人だけになっていた。そのとき急に分かった事の真相については、ほとんど疑いの余地がない。あえて自分から明かそうとしなかったが、ある誘惑の恐怖に駆られ、私の家に忍びこんできた男と、名前は分からなかったものの、私にとつて過ぎし日の無名のライバルだった男とは、同一人物だったんだ！

この自明の理が分かるほど落ち着きを取り戻すと、当然のことながら、いくつもの結論が次々と私の頭に押し入ってきた。私の弟子の人生の見通しを妨げることになった無名の人物、つまり彼が一緒にいると数々の誘惑に襲われて思わず身震いしてしまう無名の人物は、人間であるかぎり、十中八九、ジェロメット以外に考えられなかった。彼女は彼自身が申し出た結婚で逆に彼を束縛したのだろうか？ 彼女は私の家を彼の隠れ場として発見したのだろうか？ そして、彼に配達された手紙は彼女自身が書いたものであろうか？ これらの質問の答えが「イエス」だとするならば、彼の「ロンドンの用事」とは何であったのか？ 私は彼がした悪魔の誘惑についての話を思い出し、手紙の筆跡が誰の筆跡か分かった時に彼の顔をよぎった表情を思い浮かべてみた。そして、そのあと達した結論に、文字どおり心の奥底から動揺してしまった。私が馬に鞍をつけるように命令し、すぐさま鉄道の駅へ向かったことは言うまでもないよ。

あの男がロンドン行きに使った汽車は一時間ほど前に終着駅に着いていた。次から次へと浮かんでくる恐ろしい不安を静めるために、私に講じることのできた唯一の有効な手段は、ジェロメットと最後に会った場所へ電信⁽⁹⁾を打つことだった。私は返信つきの電文を送った——返信の代金を先払いしてね。

「コマッタコトアレバ デンポウクレ キシャデスグイク」

私の電文をすぐ発信するのに障害となるものはなかった。でもね、最初の数時間が経過

しても、返信は受け取れなかったよ。事務員に勧められ、私は説明を求めるためにロンドン営業所にまた電信を打った。すると、次のような電文で返答をもらったよ。

「コウジチュウ カオクヒキタオサレ アテナノジンブツ イバシヨフメイ」

私は馬にまたがって、ゆっくりと牧師館に戻った。

「彼が戻ってきたら、その日を境に私の人生は最悪となるでしょう」……「私は若くして悲惨な最期を遂げる運命なのです。それでもなお、そんなことを聞きたいと思うほど、私に対する関心が残っておられますか？」……「そのことを聞く運命にあるのです、あなたは」……こういった言葉を思い出しながら、雲のない月明かりの夜、私は家路に就いたんだ。これらの言葉があまりに鮮明によみがえったんで、そう言った時の彼女のかわいい外国なまりや、静かな澄んだ声がまた聞こえるようだった。その他のことは、あの忘れられない日の激しい感情とともに、私を疲労困憊させるだけだった。ロンドンの営業所からの返答についても、私は何とも言えない、思わず立ちすくんでしまうような絶望感に襲われただけだ。頭が真っ白で、何も考えられなかったね。涙も出なかったよ。

私は家路に就き、中間地点あたりまで来ていた。村の教会の鐘が十時を打ったが、その音がちょうど聞こえているとき、私は悪寒がゆっくりと自分の体に忍びこんで骨まで達するのを少しずつ意識するようになった。周囲には夏の夜の暖かくて心地よい空気が漂っていたのにな。七月のことだ。七月に（病気でもない）人間が寒気を感じるなんてことがあ

るだろうか？ そんなことはあり得ない——けど、悪寒がまだ私の体に忍びこんで骨まで達しようとしていた。

私は目を上げ、自分の周囲を見渡してみた。

馬は見通しのよい街道に沿って歩いている。近くには樹木も河川もない。道の両側には平たい牧草が遠くまで広がっていて、あたり一面は月明かりでいっぱいだ。

私は馬をストップさせ、また周囲を見渡した。

そう、私は見てしまった。自分自身の目で見たのだ。柱のような白い霧が——私が判断するかぎり、背丈は五フィートと六フィートの間で——私と並んで道の左端に沿って動いていた。私が立ち止まると、その白い霧も停止する。私が動き出すと、白い霧もまた動き始める。私は馬を駆って速足ギャロップにさせた——すると、霧の柱も私について来た。私は馬をまたストップさせた——すると、霧の柱もじつとしていた。

その白さは、あのととき——彼女に別れの言葉を告げに行った晩——テムズ河の上に見えた、あの霧と同じ白さだった。そして、あのととき私を骨の髄まで冷たくしてしまった寒さは、今まさに私の体にゆっくりと忍びこんでいる悪寒と同じだった。

また私はゆっくりと動き出した。白い霧もまたゆっくりと動き始めた——雲のない明るい夜の帳しぼりに包まれて。

私は恐怖というよりは畏敬の念を抱いた。理性が揺らぐかもしれないという恐怖に襲わ

れたよ、一瞬、そう一瞬だけね。私は気がつくど、ゆっくりとした馬の歩調とテンポを合わせながら、ゆっくりと次のような言葉を何度も繰り返して発していたよ。「ジエロメットが死んだ！ ジエロメットが死んだ！」ってね。とはいえ、私の意志はまだ私のものだった。自分自身を抑え、ぶつぶつ言っている自分の唇に沈黙を課することができたからだ。そのあと私は静かに馬に乗っていた。靄の柱もまた静かに私について来ていたよ。

馬番が牧師館の門で私の帰りを待っていてくれた。私は一緒に門を通り抜けようとする靄を指さして尋ねてみた。

「そこに何か見えるかい？」

馬番は仰天して私の方を見た。

牧師館に入ると、家政婦長が玄関の広間で私を迎えてくれた。私はまた一緒に入ろうとする靄を指さして言った。

「私の横に何か見えるかい？」

家政婦長も馬番と同じような顔をして私の方を見ていた。

「ご加減でも悪いのではありませんか？」と彼女は言った。「顔面蒼白で——震えておいでですよ。ワインを一杯、お持ちいたしましょう」

私は一階の書斎に入って、机の前の椅子に座っていた。あの写真は私が置いた場所にまだあった。例の靄の柱はテーブルの周囲を漂っていたが、写真をはさんで私の向かい側で

静止した。

そこへ家政婦長がワインを持ってきた。私はグラスを口につけて、それをまた下に置いた。霽の冷たさがワインの中にも感じられる。風味も元気を回復させる酒精^{スピリッツ}も感じられない。家政婦長の存在が私の心に重くのしかかった。彼女のあとから犬も部屋に入ってきていた。その犬の存在も私に圧迫感を与えていた。「私だけにしてくれ。犬も連れて行って」と私は言った。

両方とも出て行つたので、部屋にいたのは私だけとなった。

私は反対側で宙を舞っている霽の柱を座って見ていた。

その柱は次第に長くなり、とうとう天井まで達した。長くなるにつれ、だんだん光を放つて明るくなった。しばらくすると、光の中心に影のように見えるものが現われた。その影みたいに見えるものは、少しずつ人間の形のような輪郭を帯び始めた。そして、霽の中の不気味な光を通して、優しさと物悲しさをたたえた柔和な褐色の目が私をじつと見つめていた。次に、目を除いた顔と頭が、ゆっくりと私の視界に現われた。それから、その人影は徐々に姿を見せ始め、下へ下へと足まで少しずつ見せるようになった。ジェロメットだ！彼女は、私が最後に見た時と同じように、紫色のメリノ毛糸⁽¹⁾の服を着て、黒い絹のエプロンをつけ、首に白い絹のハンカチをゆるやかに巻いて、私の前に立っていた。私がよく覚えている気品のある美しさで目の前に立ち、私に最後のキスをしたとき——彼女の涙が

私の頬ほおに落ちたとき——と同じ表情で、私を見ていたよ。

私はテーブルの横でひざまずいた。懇願するように彼女に両手を差し出ししながら、「話しかけてくれ。ああ、もう一度、話しかけてくれ、ジェロメット!」と叫んだ。

神々しい哀れみが宿った彼女の目は私にずっと向けられていた。彼女は手を挙げ、裏返して見てくださいと私に言うような仕草で、机の上にある例の肖像写真を指さした。あの朝この家を出て行った男の名前が、そこに彼女自身の筆跡で記されていた。

その名前を読んでから私は彼女をまた見上げた。彼女は再び手を挙げて、首にぐるりと巻いたハンカチを指さした。そこを見ると、美しい絹の白さが恐ろしい色に変わった——美しい白の絹が血に染まって、どす黒くなったんだ。

次の瞬間、彼女の幽霊は輪郭がぼやけ始めた。ゆっくりと徐々に、まず肢体が、次に顔が消えて行き、私が最後に目にした影のようなものになった。まばゆかった中心の光は白い霧の中で消えていた。霧それ自体もゆっくりと下へ落ちて行き、しばらく床の上で空気の輪となって漂い、消滅してしまった。私の目の前にあるのは、見慣れた部屋の壁と、表面を下にして机の上に置かれた肖像写真だけだった。

翌日の新聞報道によれば、ある殺人事件がロンドンで発覚したとのことだった。犠牲者はフランスの女性で、喉を切られて殺されていた。その犯罪が発覚したのは、昨晚の十時と十一時の間だったようだ。

* * * * *

おまえは私が述べたことから自分なりの結論を導き出せばよい。この幽霊が本物だという私自身の信念は断じて揺るがない。ジェロメットは私との約束を守ったんだし、実際に私はそう思っているからね。彼女は若くして死に、悲惨な最期を遂げた。そして、私はそれを彼女自身から聞いていたんだ。

もう一度あの裁判に注目し、法廷での審議の間に明らかにされた状況証拠をしっかりと見てくれ。彼が彼女を殺した動機がそこに書いてあるはずだから。

おまえにも分かるだろうが、彼女は実際に彼と密かに結婚していた。彼が別の女性に首っ丈だと分かった、あの運命を決する日まで、二人は満足して一緒に生活していたんだ。その時から、私が例の説教の中で彼女に対する恐ろしい憎しみを彼に気づかせてやった日まで（あの日、彼の憎しみは私が言及した別の男の事件に映し出されていたんだろうが）、二人の間で激しい口論が起こっていたようだ。彼女は私の家が彼の避難所にされていることに気づき、妻としての自分の権利を公表すると言って手紙で脅してきたわけだ。最後に、あの男——いろんな証人がいろんな証言をしている男——が、殺人事件のあった夜、彼女の下宿のドアから出て行くのを目撃されていた。裁判所——これ以上の進展が見込めなかった裁判所——は、嫌疑のかかる状況証拠を発見していたのかもしれないが、なにせ確証を

つかんでいなかった。容疑者に有罪の判決を下すための直接証拠がないために、裁判所が彼に無罪放免の判決を出したのも無理はないんだ。

でもね、この私あくまでも彼が犯人だと思っている。私は、あの男、やつ以外にジェロメットを殺した犯人などいないと断言するぞ。理由は推して知るべしだ。

【訳注】

- (1) イングランド教会はエリザベス一世の時代（一五三三～一六〇三）に、ローマカトリック教会から独立して、今日の国王を首長とする。形式上は英国国民の過半数がイングランド教会の会員で、教会上はカンタベリーとヨークの二大管区がある。
- (2) 文人・辞書編集家・座談家のジョンソン博士 (Samuel Johnson)。ボズウェルの『サムエル・ジョンソン伝』（二七九一）によれば、ジョンソンは「これは五千年後の今も未解決の問題で、神学でも哲学でも、人知の及ばない最重要問題の一つだ」と言っている。
- (3) 一八四三年に農場を公園にしたチェルモーン公園 (Cremorne Gardens) は、中央部

分が立派なガス灯で照明されていたのに対し、照明の悪い周辺部分には巨大なダンスの舞台や数多くの余興場があった。ファイバス・レヴィンの油絵『クレモン公園のダンス舞台』（一八六四）では、売春婦のような派手で低俗なドレスを着た女性たちと、それに付き添う紳士たちが描かれている。

(4) マロック「窓をたたく音」の訳注(6)を参照。

(5) 一九七一年まで使用されたイギリスの貨幣単位で、一ポンドの二十分の一。一シリングは十二ペンス。煽情的な三文小説を「シリング・ショッカー」、安っぽい犯罪雑誌を「ペニー・ドレッドフル」という。

(6) 一八七一年、イギリスのマドックス (Richard Leach Maddox) が写真乳剤を塗布して乾燥させたガラス板を用いる「乾板」という方法を発明し、写真の技術が一気に進歩した。

(7) スペイン原産で絹のような細かい毛を持つている羊から取った羊毛。

(8) 一六七三年の宣誓法により、イングランド教会の信者はオックスフォード、ケンブリッジ大学への入学資格を認められたが、閉め出された非国教派は産業革命で富と力を獲得し、一八三六年にロンドン大学を創設した。

(9) 一八四四年に有線を用いた電信業務が開始され、五一年には英仏海峡横断の海底電信線が敷設され、十一月十三日から業務が開始された。

(10) スピリッツには「幽霊」の意味がある。

(11) メリノ種の羊はスペイン原産で豪州・ニュージーランドの優良種。

【作品と作家について】

本邦初訳。原題は「ジェロメット嬢と牧師」(Miss Jéromette and the Clergyman)で、初出は「牧師の告白」(The Clergyman's Confession)として『カナディアン・マンスリー』の一八七五年八月九月合併号。八七年にチャトー・アンド・ウィンダス社から三巻本として出版された『小品小説集』(Little Novels)に再録されている。

作者コリンズ (Wilkie Collins, 1824-89) は、有名な風景画家ウィリアム・コリンズの長男としてロンドンに生まれ、ロンドンで紅茶輸入業を営む商店に徒弟奉公し、一八四六年からリカンオンズ・イン法学院で学んだが、開業する気はなかった。四七年に父が死ぬと、翌年にその伝記を書いて文才を示した。そして、五年に素人芝居での共演を契機にディケンズと知り合い、彼の週間雑誌『ハウスホルド・ワーズ』に寄稿するようになり、五六年以降は同誌の編集に参加した。晩年は小説の質も落ち、健康を害してアヘンに手を出したりした。

込み入った筋と怪奇な事件のからむ小説を巧みな物語手法で書いたコリンズは、推理の知的側面にはエドガー・アラン・ポーほどの関心がなく、むしろ不可解な事件や複雑



な状況の漸進的解明に興味があつた。生涯に二十余りの長篇と七冊の短篇集を残したが、代表作としてはディケンズの後継誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』に連載されて、独創的かつ魅力的な悪漢フォスコ伯爵が登場する『白衣の女』(*The Woman in White*, 1860)と、黄色いダイヤモンドをめぐるカフ巡査部長が活躍するイギリス最初の長篇推理小説『月長石』(*The Moonstone*, 1868)などがある。なお、コリンズの弟で画家のチャールズはディケンズの娘ケイトと結婚している。

